

官板
玉石志林

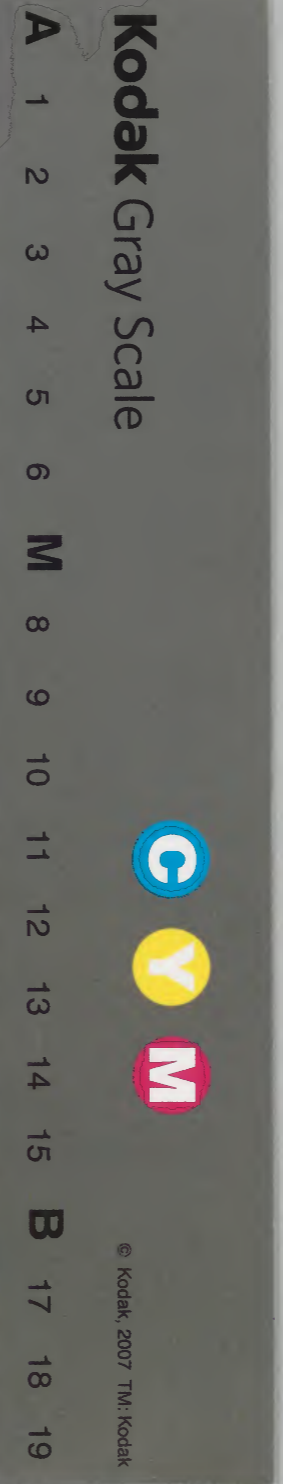
共四本
百廿九

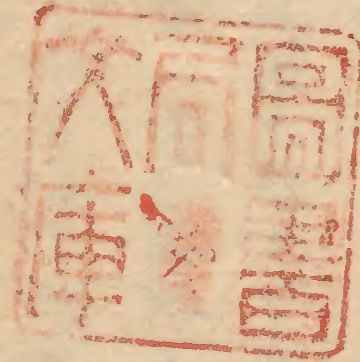
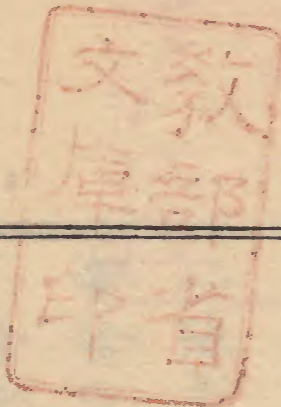
和書門			
四	一	三	四
冊	架	函	號

1222

庫文閣内	
一	四
八	三
五	五
函	四
一	冊
六	號
架	類

内閣文庫	
番號	和 43548
冊數	4 (1)
函號	185 402





目次

無人島徙民記 并附考

エ|ン|グ|及|カ|ン|グ|暹羅國の連身仔子

大地磁石極の發明

婦人イダヘムヘル地球周遊の記

支那の香港島

卷一 目次

支那の香煙

蘭語の香煙

蘭語の香煙

蘭語の香煙

蘭語の香煙

目次

玉石志林卷之一

無人島徒民記

千八百四十五年制、荷
蘭語函第一百二三葉



一地方の形勢を記し、一人民の風俗を述る一科など、其行事
實驗の世は棄てざるものならず、就裡亞弗利加を繞りて行
く海路と見出せし後二百年の間ハ、太平洋中、小島嶼の無數
群を爲る者も在てハ、人の心と著るもの甚稀なり、其遺才
所舉て見る可らざるや、是班呀アカビルコリ、呂宋諸
島へ行く海路にて、多く群島と發覺せるハ、吾人の知る所小
して、ロルドアンソンのガルヨート 一種の船中にて見たる圖

小見えたり如く、其群島は數種の名を命ぜり、然るとも、是班
 呀人、是海島は、金銀を見出すをふけき、其島を取り領し、
 人民を移徙して、力を竭すも、勞して功ふしと思ひ、尼達蘭人
 ハ力作を事とし、交易を以て世は名ありて、此念ふけきども、
 此島嶼は主とるを求る心あり、太平海中の諸島の如く、ボニ
 ン無人の訛群島も、當時是班呀和蘭人の早く己は知る所とふれ
 り、是班呀人ハ、此島をイスラス、デルアルソビスポと名つけ
 或ハ別名を命ぜり、又別國人ハ、此群島をウーステエイラン
 デンと名つく、此ハ、日本名のボニン又モニンジマの名を簡
 易に反譯せり、よて、人の栖止せざる島と云る義あり、歐邏巴

人の此海中、來らざる久しき前、内裡の臣下よて、此島を見
 出し、その人をヲガサヤラ小笠原の訛と云し、以て、是を其島名
 とふし、とり日本人屢イゾア伊豆敷より、彼島に至りて、人民を
 徙植せんと欲し、とり、一千六百七十五年、東方諸國の歲刊文
 中、長崎の三士人の行事を記せり、其人ハ、此群島の土地を
 測量し、度學に據り、檢索して、一圖を作し、是は諸島諸嶼礁
 の精密なる記録を附す、其島の數、八十九を見出し、り、當時
 此島に居住せり人ふきを以て、是をボニン島と名つく、日本
 人此名を傳へ、是より以後、其前は名つけざる島名皆廢す、昔
 より日本は、其近傍の人の通行す可らざる群島は罪人を流

千石志本 卷一

徒す風習あり此の如き流徙と攀躋す可らざる八丈島も爲り此島ハボニン島の近傍に在り此島の高八十江戸と
 3と以て此く名つくるなり新見出せし群島ハ日本人の
 言小依まハ復と同様流徙の地と用ふるべし盜賊兇犯と
 多く此島は徒し土地を墾闢せしめしが此凶惡民戸此肥沃
 なる島にて好便宜を得稼穡と興し速に數箇の郷黨を結ひ
 千六百年代の半小及てハ日本の圖中已に此群島の家と營
 して村落を成せりと載る者あり然とも此く其民と流徙
 して永く後來に傳らず五十年より六十年後にして再ひ以
 前の如く無人島とふりたりハ何の故なるを知らず凡此島氣

候平和にして許多の産物を生ずる地ありども敢て此を論
 する事なく吝嗇ふる政に従へる政官甚と遠隔せる處領と
 棄ん事と議せし故ふるべし
 此島の中の二箇ハ異常に膏腴ふるを以て多く世に稱せら
 る其餘ハ大半崑石廣野なり其中一二島ハ山谷互に出で
 景致多く許多の清淨ふる小川其中より流せ出て漸次は海
 中に入る此山の周圍は草木を生し就中蒲葵多く生ず
 多くの砂灣ハ緑色の鵜群集し砂濱變じて一面は緑色
 と成に至る大約此地方の海中ハ魚類意外は多く捕鯨の爲
 又歐邏巴の船此處小來り崑石及び海濱ハ蟹蝦貝子類ス

ラペン 鵜コノル ラー子魚名 不詳 野鳩 其他の諸鳥多し、甲比丹

ペーサー千八百二十七年、此島に至り、イスラス、デル、アルソ
ビスポと云る是班呀名を命じ、亞細亞人の述る處ハ、常ニエ
ウロパ人の疑ひ思ふ所ふるを以て、此島若ハ無人島ふらん
と思へり、此荒る島の様子と位置とを、アールツビスポ
グ云る群島の説と比較し、其時人毎ニ疑もふく、日本人と歐
邏巴人の云る者ハ、同物あるを知らず、蓋歐邏巴人ハ、此時
までハ、此無數の群島の一二ニ至る耳にて、悉く之を委く
せず、漫之を知盡せりと思へり、此を以て、日本
人と西方の海客の記す處と、小異同ある故を知らず、恐くハ、

日本人も亦天度の數を正しく度らず、八丈無人島の間、の距
離の記載誤有ふるべし、

ペーサーガミニストルペールと云る名を命ぜり、此島の
島上ニ、近頃來著せる捕鯨船中の英吉利船卒二名、隨意ニ殘
り留りたり、其一人ハ、英吉利産の人、又一人ハ、ラギサより來
り、其名をマテラモサロと云ふ、英吉利の海客の曰く、此島分
て北中南の三部とあり、北緯二十六度五十分より二十七度
四十四分三十五秒に至る、恐らくハ、此度よりも更に猶廣衍
ふるべし、二人の船卒が逗留せるペール島ハ、其中部ニ屬す、
其島の港ハ、ビスポ、フランキスホルトの名を用ひて、ルロ

イドと名く、其地の北緯二十七度五分三十五秒、グレイ緯度偏東一
 百四十二度四分三十秒、グレイ在り、其港ハ甚々濶く、且風淫を避
 るよ安穩あり、
 加必丹の船發程セシ後、直ち二人の船卒ハ、サンドウス島
 へ赴き、米里堅人二人、オランダ噠國人一人及タメハメハ三世の臣人
 若干、即ち男子五人、女子十人を移卜己と共に、ボニン群島上
 へ其居を占ひ、一千八百三十年彼の五月二十一日、其火伴總
 て二十人にて、ハウイ又ヲウイヒと出帆セリ、此地ハサンド
 ウス群島中の最大島なりとて、其名世々著り、且數年前より、
 ハウイス、ツイスコウセルと題セリ、日刊紙を刻行せりと云

ハ、英吉利の領事官リカルド、カルトンと云ふ者、此ボニン島
 徒民、合衆の旗を與へ、且彼等ハ、國家の爲よ力を竭セリ者
 なる由の確證を與ふ、此を自己の費用を以て、ボニン島人
 民を徒植せんが爲よ、危嶮の地を履るを以て、是を與へし
 かり、上云ふ二人の酋長が引率セリ人衆の外、此人衆を載
 て、ボニン島へ行し、スクー子ル船中の人も、此中へ加ふる、
 其人口、總て三人、内アメリカ人一人、サンドウス島人二人と
 す、是に於て、總人數二十三人とふる、一千八百三十一年、英吉
 利の捕鯨船侶の中より、九人此社へ入る、一千八百三十三年、
 此島の近傍に於て、アメリカカウレルソレ名號捕鯨船難船し、此

船の人衆の中、十二人此島に上り、命を全ふせしが、内四人此島に留らんと心を決せり、然るに、此新と繁昌に向んとせし徒民の業、乍ち滅絶せんとする大危急の事出来たり、英吉利の一捕鯨船侶、其船卒を此島に留めんとす、島民強て是を拒めども肯せず、十四人とペール島に留めて去る、此者他の悪徒と謀を合して、徒植せる人民を殺し、其居住を焚き盡んとす、幸して、此悪徒半は不意に殺され、其餘の狂悪人ハ、シド子新和蘭東岸の新府新ソイトワレス同上の一府に放逐せりと

此新植民ハ、本此地に來る船より離れて、此に留りしる一

二人の船卒より始まりて、次第に蕃滋せしうども、久しく此島に留る後、彼等大率復し此島を去るを以て、久しく土著に續くを能はず、一千八百三十七年、彼の八月、ラレイグ名號船ペール島の首地ルロイド港に到りし時、其人口總計四十二人あり、其人多くハサンドウス島よりと云ふ、一千八百三十八年彼の五月迄ハ、サンドウス島二人の首長モサロ及ヒミルリカムブスに僱ひて力作せしが、此時より以後、南海の島人志盈ち驕りて、怠惰となり、膏沃の地甚しき勞碌を須いずして、大利益を得べきし、一切を放擲して治むる心ふし、モサロ及ミルリカムブス曰く、每家三人、三十家の



眷族、此島一來、船に就て、衣服諸器具を買ふ足るにけ
の金あらば、ルロイド港のこゝ居て、各々好生意と得るに至
らんと云り、又人謂らく、此一群島上、ハ唯政堂より差遣せ
る一人の權勢を握る首長ふきを以て、大闕典とせり、其故
ハ、每人各自來着せる捕鯨船に食料を賣んと欲して、植民の
内、怨惡及び不和を生じ、又ペール島土人と船中人民と、屢
諍論を起す、至まば、是を以て、好船卒のこゝ撰り乗せ
たる船ハ、島人其船卒と鬪を起して、降らしめらるんと恐
きて、是に近寄ず、是に反して、善惡を撰り、船卒と乘たる船
ハ、悍惡の者と、其地に遺り去り、其人土人と騷擾して、安和ふ

らしめず、生理と害し、所持の物品を損傷するの危に至ら
む、

ミセルズインと云る人、ペール島徒民の詳記と著せり、此人
の記に曰く、徒民の酋長、余は男女間の小少爭論と和せんと
と求む、然れども、余ハ公りの權勢を握らざるに、唯こゝと
諫て和順ならしめり、是くの如き害あると無んば、新
植民次第に繁庶すべし、此土ハ今サンドウズ島に居る英
吉利領事官、及び直に不列顛の政堂より此を防護す、若し英
吉利より、此土の太平安和を守らざるに、相應ふる兵力を遣る
の議一決する時ハ、速りて政令好らざるサンドウズ島の交

易の半を割て、ルロイドの港へ移すと有んと或人の云く、
 ペール島は、既にアールドアーケルスラスロ。詳ふインヂ
 アーンセコーレン 殺類の名 詳ふ葱、韭、ヤムス、ポムプリー子 詳ふ
 ワートルメルリン 瓜類蔗糖を植ると極めて多し、又煙草を種藝
 せんとする策あり、土人以爲らく、若し煙草を植るば恐らく
 其他の産物廢するを有んと云り、其故は、煙葉を摘み取て製
 するよ人手足ごまばあり、此土の煙草は、特抜ふる形状の物
 あり、又二三株の狗^カ樹あり、是は實を種て生せし所あり、此
 樹は多く實を結べども、金と致すと無と以て、是を種藝せず、
 家猪と蕃滋すると甚と多く、此土に來る船は、肉片の大小

は應じて、四ドルラルより、九ドルラル迄は買取れり、家猪は
 飼ふにインヂアンセ、コーレンを用ふ、又ペール島は野猪甚
 多し、サンドウズ島の犬を用ひて獵を爲し、此犬獵師の指令
 に隨ひて野猪を蹤跡し、極めて強猛ふる野猪をも襲ひ咬む、又
 禽鳥の闕乏ふる者あり、徒植民戸初の遠方より將來れる獸
 畜を甚と重惜して妄に用ひず、其物増息するまで待とうと
 今、この獸畜甚と蕃息して、種藝せる田野を妨害するに至れ
 り、大海を以て他島と分界せる此島の南端に多くの山羊あり、
 是地には馬ありとあり、唯ラレイクが遺せる一雙あり、耳
 又野生猛獐人を害する獸畜ありと見ず、又蛇あり、猫あり、然

31 多くの鼠の、沙魚サマの海濱の洋面1數多居る、但1小1
 して弱し、水淺き處1てハ、犬、沙魚を咬み、乾沙若くハ沙洲1
 引揚ぐ、
 此地木材1闕乏か1と雖も、若1多くの人民、此處1居住す
 ると有バ、闕乏する1至らずと云ふ可らず、若夫帆桅と爲べ
 き材ハ、一掃してふし、左マナと名つくる木あり、此木を鋸し
 て板とふし、家什を造る、懸鉤木ヘイコウキハ、堅實ふるを以て門柱等と
 爲1用ふ、白檀のれども、甚ど少く1て記載を爲1足ず、モサ
 10ハ、一人1て三月の間1、三十ピコルス斤名を取り聚む、方今
 の徒植戸、此島を縦横1蹤跡すれども、古への土1居れる人

民の遺蹟を見るときふし、

大ブリタニアの新1領せる此地ハ、今1至て、我輿地家未記
 載する所ふし、此地ハ、不列顛人、日本1抗敵する前營とあす
 ハ、固より、疑ふ可と無と雖、英吉利政堂日本1對し、敵對の志
 を抱けりと言ふハ、信ず可らざるあり、恐らくハ商人及び奸
 人の爲1催1起さる、支那1有する如く、一たび日本1向て
 兵を發すると有んら、今ハ既1諸般の英吉利の捕鯨船侶、日
 本の海面1て、盜賊を爲ども、罪せらるゝとふし、此船の船卒
 ハ、半ハ獷悍不化の人民ふまバ、是等の人の是くの如き海賊
 と爲て、利を得るをふり、疑もふく英吉利後來の1趣向を生

す。ふ。び。一。日本一。二の英吉利の大小船隻を奪取。其
 乗り居。其人民を。其邦俗。順ひて。海賊あり。と。て。慘酷の
 死。至ら。必。有。事。あり。是。の。如。く。ある。時。ハ。
 英國の商人等。其政堂。請ひて。軍艦を發し。日本。來り。其罪
 を問ふ。一。今此罪を問とき。日本。て。蔑視。て。之を屏け
 ば。支那。て。有。如。く。暴虐を用て。是を屈するの策。出。外
 あり。一。然。時。ハ。地球上諸人民の交易を。輓。近。至。迄
 鎖。て。通。せ。さ。一。國。一朝。其道。ひ。ら。け。二百年來。一。所。積
 累。セ。二。千。四。百。萬。の。民。人。世界。に。散布。し。徑。一。歐。羅。巴。の。風。習
 一。薰。陶。する。と。わ。る。一。

附考

千八百五十一年刷、ハンヘウス
 デン撰、地理指南卷二、日本條末、

ボニンシマ又名アルツビス。ポエイランデンハ、日本本島

の南東ラドロ子。諸島の北西。一。在。り。ボニンシマハ、林木
 蔚茂。山巒起伏。一。島嶼。太。都。八。十。九。其。内。十。島。ハ。日本。の。植。民
 居住。其。人。耕作。打。漁。及。ひ。材。木。の。買。賣。と。生理。と。ふ。す。此。島
 上。ハ。日本。の。政。令。及。ぶ。と。ふ。一。

二 千八百四十九年刷、カニナ
 ビク撰、地理讀本の第四卷、

日本島とマリア子。島の間に、北緯二十七度の間に、世
 著。一。と。少。一。群。島。あり。其。數。八。十。九。但。其。十。島。の。と。人。民
 居住。一。日本。の。人。民。を。此。島。に。徙。植。す。島。ハ。山。岳。多。く。林。木。繁

茂す、氣候平和、穀禾、稻米、莢豆、重價の木材數種、又打漁、田獵も其利多し、此島日本の徙種に係ると雖も、必ずしも是を其統轄の中の一數へず、

三 千八百五十年刷、カラムル
ス撰、地理書第二冊、日本條末

ボニン、エイラン、デンハ(又ボニンジマ、又ムニンジマ、又アルソビスポ、エイラン、デンと名く)日本とラドロ子ンの間に在り、八十五個里方の大を占む、島數統計八十九箇、其内十箇ハ人物居住す、其至大なる者と、北島及南島とす、ペール島、ルロイド港あり、近時英吉利より人民を徙植す、

四 バン、エイ、キ、ル、ランズ
ズ撰、韻約地志附録

モニンジマ、又ボニンジマハ、日本の南東大瀛海中に在る一簇群島あり、北緯二十七度、東經一百三十九度、に在り、此群島アベル、レミ、ユサトが紀ありて、より始めて世に著り、古昔地圖にハ、アールツビスコップ島と名く、此地に華麗なる木材及び穀禾を産す、

第三十九 四十葉
エング及びハカン、グ(暹羅國の連身孖子) 千八百四十二年刷、荷蘭語函

の右に畫き、カニングハ左に畫けり、ハ一千八百十一年に、暹羅海岸の一小邨中に生じたり、○此孖子を産す、以前に、其母

姿容美しき兒子を多く産り、是連身兒を産する時、少くも怪異の事無し、萬事皆常の如くふるまひ、其兒の父母ハ其支那種とるを知ずと雖も、支那の人種とるとハ、容易に知り得べし、何と云はば支那人ハ、前面に俯して行歩し、且其皮色黄と帯ひ、其髪黒色と云ふなり。○エング及びヒカングハ、殊に其確徴あり、是より由て、其支那の人種とると、一目瞭然たり。○世人の説く如く、其父母ハ貧窶にして、捕魚を以て生活とせり、一千八百二十九年迄ハ、仔子自ら漁せし魚及び他の海錯を賣り、椰子油を製造し、或ハ養禽を業としたり、此年亞墨利加の甲必丹に伴ひて、亞墨利加に渡り、留ると兩月にして、英

吉利國地方へ渡海せり。○是海旅の間、仔子の一人海中に浴せんことを欲せり、然るに、其一人ハ、此を好まざり、斯く其好惡の違へると、外より是を觀じ、笑へき者甚多し、各其至情より出て、已むを得ざる戯曲を演ずるなり、蓋此兩箇の生物絶不相共に生活すべき罰と、造物者より得るを以て、其意十分一和するに非ざれば、其生を保つに耐ず、其意一とひ相反するに有が如きは、兩人の爲に嗟歎す可し。○此連身兄弟の嗜好及び思慮を一致せしめんとする時ハ、寔に互に相和し、幸に兄弟中争を生ずると稀なり、何と云はば、彼甲必丹中に居て、其不和を調ふ

此ハ速ニ相和するを以てなり。○其身體輕捷なるをハ海上
 旅行の間彼疾走し升降し踴躍せしめて、明りかり、一日、同船
 の人彼を其後より追し時、既し一二回甲板の周圍を遶て走
 り、頓し舷窓を飛び踰し、其捷さをハ、健足の水夫と雖も、辛
 しく之に従ふ計りかりき。
 此兄弟の其體を連ぬる處ハ、其胸にある手掌大の肉瘤あり、
 ○此瘤ハ、胸骨より生じりと見ゆ、但し其胸骨ハ、胸空の中
 央を前面より掩ひ、其下邊ハ、劍狀軟骨と成て、胃の處に迄下
 行し、此肉瘤ハ、二人相持の部にて、兩體間に懸鉤せり、初生
 の時より、此部甚柔靱なり、是を以て、其雙兒隨意に左右上

下し回轉するを得、由て意ふし、其臨盆の際、一兒の頭ハ、一
 兒の足の方に向て、出産せるるべし、然れども、其後回轉し

連身
 孖子
 エング
 カング



欲するの情ありし由て、此瘤甚ぞ延長し、長ずるに及びてハ、
 互に并立つし至れり、然れども、彼其腕を互に組み、互に其一

て、初ハ、其
 顔面殆と
 相對せし
 ら、後絶へ
 ず互に相
 離れんと

手と肩と搭して、其兩手ハ前、兩手ハ後と置けり。○故に右人ハ右手、左人ハ左手と自由と使用す。○然れども、其兩個の後手と前と出と得べく、加之其瘤の柔靱ふるに由て、其位置と變換し、エングハカングの左へ行ふ、カングハエングの右とふることを得、是に由て、亦其手を變換し用ふるに自由なり。○然れども、此位置ハ、甚牽強ふるを以て、常に速し、再び通常の位置と復る。

カング及びエングハ、其行歩、坐卧、疾走、游泗に於る、一人の如く、其生機官能、一心の使令に従ふ如く、總ての運動を同時に作ふる。○其他被同一趣向と具へ、一樣の希望をふし、一樣の

需索と起し、是と同時に言ひ出さる。○其甲人未曾て、乙人の睡眠するを見ず、何如とふまば、同時に睡り、同時に覺る。加之人或ハ彼の睡と覺さんと欲して、甲人を驚寤すれば、乙人も同トく醒覺するなり。○エング睡中疲瘁し轉側せんと欲する時、自らカングの軀を踰へて左に轉ずまば、カングも同くエングの下より右轉ひ、此運動の間、絶へて兩人の睡と妨ぐるまふ。○此諸件ハ、兩個の生物、只一人に成れり如く契合し、又睡眠中、足と屈伸して、謾に動轉するに、亦絶て此少の妨を見ず。○此兩兄弟絶て互に譚話するまふ、一二の號と爲ともふし、人傍觀して、何如して、其意衷と通ずる

やと、測り知ると能はず。○彼十八歳の年、其本國を出と雖も、
 斯く互に咄黙する小因て、其本國の語を全く遺忘しり。○
 彼ハ他國の語を學ぶに難らざる事と見え、歐羅巴に滞留
 の時、當てハ好く英吉利語にて話し、既し又少許の佛蘭西
 語と會得し始むるに至れり、其面貌ハ總て相肖同一人、其聲
 と聞き、其口の動くを見ざれば、兩個の兄弟、孰れり話説す
 やと、辨別するに能はず。○一千八百三十六年、エングカング
 歐羅巴に周遊せし時ハ、其年二十五歳なり、二人の骨格甚
 端好筋力強實、其一人ハ身材稍高く且稍肥大なりと雖も、概
 するに五尺許、其短少なる者も、隨意に甲人の肩に搭すと

妨とげず、○其他カングの血液運行ハエングより速なり、カ
 ングの脉動ハ一分時に七十動、エングハ八十動なりと以て、
 是と知かり、其髪とハ、其本國の俗の如く、後頭にて結束せり、
 又其滞留せる國よりて、各國の常服を服せり。○其體愈著せ
 る部分の外、異なる所あるを見ず、其愈著部の爲し、俱し其襯
 衣中に一孔を穿てり。○肉瘤の長、上端ハ太抵舊尺の二寸許、
 下端ハ四寸許、其幅ハ三寸許ありて、其尤厚き處一寸半あり、
 ○此連接せる部の奇特なるハ、其瘤の中央を刺し觸る、時
 しハ、其兩人同時に其刺し、と覺ゆ、中央より少く右、或ハ
 左に觸るれば、獨、エング、或ハカングのみ是を覺ゆるなり。○

此奇特なる事、依て、醫師或ハ斷して曰く、少クも害を貽す
 と無いて、此兩兄弟を分斷する事、難らざると云へり、
 此孖子天賦の筋力、自ら同一からざり、故に、エングハ尤も
 剛強を以てカングを指揮し、持し其兄長とふり、カングハ其
 筋力これに譲り、好んで其指命に従ひ、弟禮を執る、是を以て、
 其軀分れて二人ふりと雖も、恰も一人の如く見え、又只一人
 の精神を賦せられ、者の如く見ゆ、○加之、其一人病に罹る
 時ハ、他の一人も是を悩むと見え、○又或時、一回カング
 と瀉血せし時、エングハ、其身の違和を覺え、其後も快暢ふ
 らざりきと云ふ、

大地磁石極の發明

千八百五十二年刷、荷
 蘭瑞函第五百五十五葉

造物者、有形物の世界に於て、一二普通の力徳を萬物に賦與
 し、其陶冶の徳を表し、其高妙なる志業を達せり、是と同く、亦
 無形の精神を總攝するに、其嗜好する所ハ、心を凝し慮を殫
 して、已んと欲して能ざるの情を以て、吾人知ず覺ず、人間凡
 百の事業を舉行ふハ、此情ありし由なり、然れども、造物の此
 一定せる法制に循ひて行ふよりも、人をして其心神を陶鑄
 して、高妙の天徳に達せしめ、又且人間の禮俗を成し、智見を
 長ぜしむる、第一の本源ハ、福利を徼むる人情の外、凡そ吾人
 の五官にて、知覺すべき萬物、盡く其淵源を探り覓んと、深く

好く、厚く嗜む心一在り、此嗜好ハ大凡吾人の學業ニ進修す
る淵源一して、閎麗なる究理發明の中、輒近一箇の發明、數百
年の久しきと歴て、徒ら一造化の法制と究んとりて、遂一未
其底蘊と發する能はざる物一在て、現一一步を進むるを得
ざるハ、此嗜好の徳一由れり、其法制ハ、他一非以、吾人大地上
一見る所の磁石の景象と發起する所以の造化の法制、是ふ
り、○凡物ハ、其根本する所無して成との、非る時ハ、大地の
磁石力も亦必ず其然る故の根本有ざる可らず、○今器械と
用ひて、高く拽升せる物體の下り墜る運動ハ、其一定せる法
制一順ハ、此法制ハ、物體と運動する、世一顯著なる力勢と以

て、是と算すべし、然る時ハ、實一現存せる磁石原質の由て以
て、其作用と發する所以の法制も、蹤跡すべし者あると明か
り、此大疑團ハ、實一猶消釋するところ、今も常一大地磁石力
の妙用と逞する所以の理一、通曉するに能はず、然れども、其
力の流行する状ハ、幸一是と確定するに得て、遂一其力を
發する所以の造化の法制と發明して、殆中らずと雖も、遠り
らざる一至れり、
磁石力を緊切なる日用ニ供するハ、航海ニ用ふる是なり、凡
土地と認むべき緣故、既一絶する渺する大瀛海中一在て、
亦航海の針路と辨ずべき日月星辰も絶て觀る可らざる時

一方て、羅針盤を以て、嚮導を爲す無ハ、海客此際一方て何を以て、航海の術を施さんや、然れども、磁石力の説、今より少前未ど明らぶらざりし間ハ、羅針盤の指す所、十分海路安全の指南に供するに足ず、實に疑謎の景象と垂る、故に、膚淺の見して、一目すれば、甚と哀むべき景象を示す者の如く思ひたり、

羅針盤の主用ハ、本磁石力の顯著なる性情に根本するを以て、轉動自在にして、浮動せる磁石針ハ、自ら其一端北に向ひ他の一端南に向ふと云ふ、是尋常一様、世上に行はる、説ふり、然れども、磁石針の方向、所謂磁石子午線ハ、大地上の各

地に在て、多くの南北の正方位なる日中線即ち星學家の子午線と、多少の角度を爲す、是を磁石針の躲避又デクリナチ」と名づく、此躲避ハ、北極針を以て、正北一點より、東西に控く度、應じて、東に躲避し、或ハ西に躲避す、初て此躲避を實驗せしハ、何人ふりや、詳ならず、或曰く、一千四百九十二年、龍ゴキ既して是を發明せりと云ふ、然るに、十六百年代に在て、猶人此躲避あるを明知するを無かり、然るに、方今に至るハ、此一事既し疑ふ可き者なく、歐羅巴の全西部、全亞非里加、及び亞細亞の一部を通じて、皆東部亞墨利加の如く、方今の躲避ハ、北極の西に在り、グリンズウィッチに在てハ、西の方幾

ど十七度^二在^レル○細心^ニ觀察^シて、大地上^ニ在^レて、其躲避彼
此相同^トシ^テ諸地^ニを曉知^セり、其諸地^ニを連ねて、地
圖上^ニ屈曲^セる線^ヲを引く、此線^ニを同角躲避線^ト名づく、
若夫躲避^スる^レの線^ハイソクリニス^ハ大地上^ニ在^レて、磁石針細密
^ニ北^ニを指^スる諸地^ニ是^ヲ引く、北半球南半球の無數の所在^ニ
於て、故^ニさら^ニ實驗^ヲを爲^スる後、下^ニ述^スる磁石力の道路の線
と發明^セり、此線^ハ大地磁石力の南極^{ヨリ}始^ル、北西の方向
と取りて、舊新^ニ震^ノの間と進む、然れども、數箇の蜿蜒屈曲^ト
爲^スる故^ヲを以て、地上^ニ引^スる人作の經度の如く、齊整^スる^レの
比^ニ非^ズ、此方向俄^ニプラタ河の口^ニ到^リて、變^トて北東と

ふり、赤道と距^ルる^レ五度^ニ及^テ、再び北西の方向を取^リ合
衆國と切^リ、華盛頓と過行て後、大地磁石力北極^ニ到^リて、續
て北西の方向と爲^ル、大地の西半球、既^ニ是の如^ク線^ハある
時^ハ、東半球も是^ヲ細查^セば、現^ル同様の線路^ハある^レ明白^ナ
久^ク○此線^ハ、新則蘭土^ノ側の大瀛海^ヲ經過^シ、新和蘭の西端
と切^テ、印度海^ニ來^リ、蘇門達刺^ノ側^ニ分^レれて二支^トなり、
東支^ハ、支那及び東悉白里亞^ニ向^ヒ、西支^ハ、包社亞拉非亞^ニ俄
羅斯^ノ譬^バ加山^ニ向^ヒ進む、然れども、二支共^ニ實^ニ再^ニ大
磁石力の北極^ニ至^テ、合^シて一^トなるべし、東西兩半球の此
線^ニ近^{づく}に隨^ヒて、躲避の度次第^ニ減^ズ、磁石針と携^へて、

此線の一方より、他方へ移れば、初め東邊の躲避を爲すの變
 じて、西邊の躲避とあり、是は反する者なり、此と反す、
 磁石針の此躲避は、兼て別は切要なるは、其針の歌反、即ち
 クリナチー是なり、今若し鋼針は、磁石の氣を賦界し、細し其
 重心を平正の樞紐上より立し、之を大地磁石の子午線中
 へ安置する、其針磁氣を得ざる前の如く、復平正の位置を
 取らば、其平均を失ひて歌反す、其形大地の北半球に在て
 ば、其針の北極に向て傾き、南半球に在てば、其南極に向て傾く、
 是の如くして、平正線と相畫する所の角を歌反と名くる
 なり、此歌反ありて、平正の磁石針は、細密し、其重心を安

んず可らず、大地の北半球に在てば、稍南を重くし、南半球に
 在てば、稍北を重くすべし、是を以て、歌側大に増減あり、遼遠
 の地は、羈旅する者なり、針を平正の位置に安んぜしむるときは、
 或は銅錘の小なる者を用ひて、針上より自由に進退せしめ、或
 は一片の蠟若くは封泥セルゲルを取りて、針を貼りて、其平均
 を救ふなり、磁石針の歌反も亦大地の各處に於て、甚く種々
 ならず、殊に輿地家の緯度順ひて、變化する者あり、似たり、
 此歌反は、ブリュニスウイキの地にては、方今六十六度若く
 しくは六十七度あり、磁石平分線の地にては、其針平正とふ
 り、夫より兩極の方へ進むに應じて、歌反増し加はる、凡て大

地上より、磁石針同一様の歌反ある諸地ハ、別種地圖に線と引て之と結連す、是と歌反線と名づく、其歌反ハ諸地と互結連せる線と磁石平分線と云、是平分線ハ、輿地家の赤道線と十分一符應セテ、兩度赤道線を切過し、南の方へ往くと十五度餘、北の方へ距ると十四度四分の三、今ハ是平分線の循行する道路に沿て、其順次を擧ぐ、但し南半球の最南一點の地より其始りを爲す、其地ハ南米里堅と亞非里加の間、チリニダト島の北、即南緯十四度或ハ十五度ハ在り、此線嗣て横し南米里堅を經過し、字露の都の上より、大海中より來り、徐に赤道線に近づき、鐵島初度一百度按す、鐵島西經あり、下りて

赤道に達す、然れども、之を切過せず、再び南半球に却退して、一小狹弧を爲し、アウスタラの島の上より、赤道と切過し、北半球に來り、横しミルガラの島同上を過し、カロリナ島と切過し、殆ど赤道と平行して、更に錫蘭島セイロンまで進み行き、今ハラケデヘン島印度海にイロンの西少北に在りの西に升り、再び南に往て、赤道に近づき、アフリカの海岸の東より、南半球に進んで、八度の地を切過し、終に原、其始を爲す地に向て返り、此順序なく、屈曲せる線を、大地磁石力の平分線と名づく、此順序なき所以を解するに、各地の原由を以てせんことを求

る者あり、譬バエルバ島ハ、鐵坑及び磁石山あるを以て、磁石
 針ハ、現ニ感動を起すが如き是なり、但是の如き局部の感動
 ハ、甚採擇す可し似たりと雖モ、是説ハ、天地の諸景象を務て簡
 約して、諸の發明に應ずべき法律上の合するやうし、説出
 さんとする萬物究理説の需索に充るに足ざるか
 大地磁石力の諸説の中、スウード、ハン、ステーレンの説ハ尤奇
 異とし、其説にてハ、大地の内ニ、二箇の十字様ニ交叉せる磁
 石圓軸あり、然れども、大地の中心を撫循せず、此ニ軸、其力强
 弱同下からず、甲ハしより強きと、一又四分の三より、其位置
 を考へ觀るべく爲んとするにハ、大地の内部ニ、一樞紐ルニ

ありと定め、其南端ハ、フニゲイメンランドの下、其北端ハ、北
 米里堅中ヒドソンス港ニ在り、若夫弱磁石軸ハ、其位置ニベ
 リ地方の北氷海及び南米里堅ホールン岬の間ニ在り、此
 説にてハ、二極ニ非ず、四極あると知べし、第一極ハ、新和蘭内
フニゲイメンランドの南、三十度、第二極ハ、バツヒンス港ヒド
 ソンス港の西側ニ、第三極ハ、南氷海の氷野の南西、第四極ハ、
 新ニベリーの海岸の北、十一度ニ在り、近世幾多の驗査あり
 てより、此説の無根の話ふると証し、且新説にてハ、唯二極あ
 りて、其兩極ハ、地球兩極の近旁ニ在ると一定せり、
 方今幾名海客、精勵倦て、百般の危嶮を犯して、劬勞を辭せ

又因て此一項に就て、明白を致し、今の地球の磁石兩極に就て、十分正確の説を得し至れり、一千八百三十一年、第五月の季某日、甲比丹ヨニコス從前未嘗て人の到り得ざりし北緯最高度地に於て、磁石針の種の、の惟むべき躲避及び至大の歌反を見たり、是景象よりて、大地磁石極ハ、氷海中、當時其船の居れる地より、甚と遠りらざるを証し得たり、是より由て、第六月三十日、甲比丹ロスハ、一切旅装の具を、其船中へ遺して、小舟に乗り、僅に一二人を率し、厚き氷に閉られし洋面へ漕入、許多の患難を冒して、其船を進み、只管磁石針の方向を親驗しつゝ、務めて速に希ひ

望めし一地に至らんとせしが、同年第六月四日朝八時、始て其地に達し、因て疑團を氷釋せり、此地ハ、許多の年月を経て、苦辛しとる秘蹟の一點地にして、宇内各個の諸磁石の著しく傾き向ふハ、皆此地とる疑ふべきと決せり、何とふれば自在に泛動せる磁石針、其平正の位置を轉じ、歌反するを九十度にして、全く直立すれば、其地、丘陵駢ひ立ち、其高五十尺あり、六十尺に至る、然れども、別々目中に歷るる景色、造化此地に彰著する者を生ずるをふし、甲比丹ロス此極の近傍に來り、舟を廻らし行し時、磁石針從て回轉し、其北尖を以て、常に此北極の方に向ひしが、極下に抵り及て、此動

氷の塊段、北部より其延袤廣大にして、徧く南極地方を鎖
閉せしを以て、其到んと欲する地に達するを能はず、然るに此
諸難を冒して、其極の近傍に到り、數百回考索して、磁石力南
極の在る地を精密に測量し定むると十分なるを得、至
れり、學問の壤域内に在て、此成功を得るとは、故らに是が爲
に艱送せし、實に衆海侶の賜にして、其功遺る可らず、其人ハ
米里堅人ハ、甲比丹、井ルキー、一千八百三十七年、英吉利人
ハ、デイルムスロス、一千八百三十九年、佛蘭西人ハ、水師提
督デモンド、ユルヒルレ、一千八百三十七年、デイルムスロ
スハ、涼き三夏に逢ひ、遠く南緯七十九度まで船を進り、其旅

行中して、新に發明する所多くして、星學者がウスが定めら
る磁石南極ハ、誠の極に非ず、確證を得ると雖も、ド、ユルヒ
ルレが磁石極を觀察して、宏美の偉功を建し、此學を弘廓
する非常の績にして、其功尤高くとす、一千八百四十一年第
三月四日、ロス精密に、其真極の地に到り得ると雖も、此ハ
精確からざるの左証を得ると、其証ハ、ロス南の方に進み、磁
石極よりも、遠く船を行き、とるを知べし、ド、ユルヒルレも亦
一千八百四十年第一月、磁石極の近傍まで船を進み、諸羅針、
盤の針、復と平正ふると能はずして、全く用ふ可ざるまで、歌
反せる地に到れり、其他、此諸海客の見識、一も十分正確を得

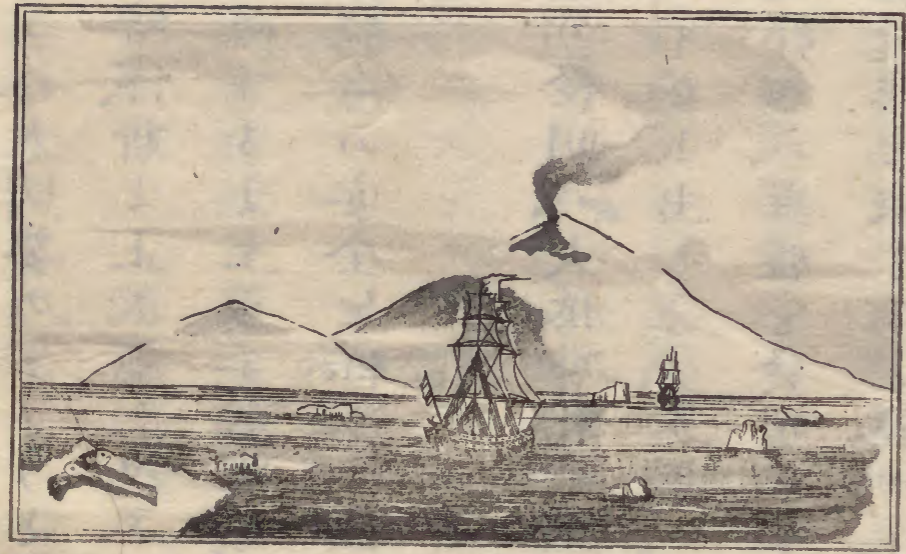
る者ふりり、有名なる佛蘭西の水師提督デペルレイ諸説と比較し、精密に推測して、始て至精至當に真極を確定する大偉を得たり。此真極の地ハ、一毫の疑ふに磁石南極ふく加之甲比丹ロスハ、彰著なる磁石力の景象を觀覽する機会に遇ふを得たり。一千八百四十年六月十二日、ケルギエレン列島中ケルス港内一船と内札第一圖久しく此に留り居らんと欲せり。六月廿九日、磁石力の暴作を得たり。此暴作ハ、歐邏巴の諸地しても、皆之を驗し得たり。其非常の作用ハ、器械に感ずると著しきと以て、磁石原質の散蔓する勢の巨大驚くべき顯証を收得たり。其原質大地の中徑を透過するに、光

及電氣の速力も同じ、甲必丹ロス初り北方の極に達せんと欲せし素志を換へて、今ハ更し南方の極に到らんと欲せり。是に於て、十二月十二日、其船アウ克蘭ズ島新則蘭土の南に在りと去り、一千八百四十一年第一月一日、無數氷山の間を透過し、アンタルキスの近傍に來り、密霧冥濛、風力恬靜にして、船を進むると難く、大に時日を玩愒せり。既にして、細雪密灑して、一切の素志皆遂るに能はず。英法二百里の海路を濟り、同月九日に至り、始て開敞せる海水に達する。是より直らば、磁石極の地に到らんと志し、遙く遠く南方に進み、同月十一日、其船南緯七十度、東經百七十二度の地に到り、其船と極と

の間、一萬二千尺の山ありと看る、其山ハ、千古の雪を戴ふ、
 光采閃爍あり、此地より更に遠く南の方へ進み入り、磁石極
 へ達せんと欲す然るに、是に至て、諸の障碍競集し劇甚の颶
 風南より吹來り、密霧消せず、密雪止時なく、其船を以て少
 も前進せしむざらむんと欲する者の如し、然れども、見出
 したる國土の海岸を查明せんと欲し、同月廿九日、火烟諸島
 へアウホルトの前へ到る、此に其高一萬二千尺の火煙山あり
 此山を命じて、エレビス山と云ひ、漏斗状の火坑あり、ハ
 ルホルの名を命じたり、蓋此二名ハ、其駕したる兩船の名に
 取れるあり、第二圖ハ、即ち信据するに足れる地圖あり、第二

月十九日、其船南緯七十六度、東經一百六十四度の地へ達す、

ベル
 ウホル
 ト
 火
 島
 磁
 南
 極
 石
 上
 焰



故を以て、猶南極と距ると、
 八十里許あり、然るに、造物
 此島へ上陸して、切用の地
 へ切近するを許さず、然る
 と雖も、此船從來に比すれ
 ば、三五百里遠く乗り入り
 此南極の位置、上へ説きたる
 北極の本地へ到れる者と、
 殆ど相符合する確證を驗

南極磁石上焰火島磁南極

一得するハ大切要の事なりと思はざるべけんや、
海客の所作斯し止る上し説する發明、尚未磁石力動運の法
制と看破するし至らずと雖も、更し其業を進むるの階梯と
ふり、且航海の安全を保つし、極て切要なる根基と爲し足り
ぬべし、

羅針盤の發明ハ、大抵皆那波里人フロラヒオメルヒ又フラ
ヒオギオガし出と云ひ、其年ハ、一千三百二年し了ると云ふ
或ハ支那人ハ、羅盤を發明する本原なりと云ふ説あり、未だ
十分其是非を決するに能はず、古記し依れば、一千二百六十
年、弘法使者マルコポラオ支那より羅盤を携へ返れり、此人

の話し、當時支那人ハ、歐羅巴にて用る如く、磁石針を其重心
上し支一ず、是と一片のキルクの中央し駕し、水上し放て、十
分期する所の効と收りなりと云ふ、此設施ハ、甚ど簡約し
て、大し智巧と極む、其故ハ、水ハ自ら毎し必ず純乎なる水平
と成と以てなり、椰椰代醉編推蓬寤語術家鍼盤用水浮鍼視
其所指以定南北云、倭舡尾用旱鍼盤云、不如
水鍼盤、此人又云く、支那人の説しハ、紀元前一千一百二十年
に當て、帝シニングス周公の訛く、史記し、ハ、星學し精通する
指南車、周公旦所造の發明せりと云ふ、二個國人あり、

佛蘭西國學士數名ハ、ダオヨト、デプロヒンス
の詩人、フランシスの詩

く説と久○此婦人の手記せる牘子に據る其第二回の地球周遊を全く成し終り三年半を經の後近時倫頓に到れり其行路の事を説く前に讀者をして此婦人の一二絶倫なる事を知しめんとす○其婦人の此所入の歳を以て其世界に於て其行記の序中に云るあり曰く壯ふり一時に頻し遊歴を欲せしが其家族の雜事は沮され當初に全く志を遂ざりし○然共其二子成長して商人となり且其夫の死せしを以て一身自在にあり久其曾て地球上の諸方に在る造化の奇異なる事を目撃せんと欲せし其少年の時比すれば更に盛旺なり○其齡ハ既千七百年代の生か

るを以て、女とするも障碍の事故なくして、旅行し得べく、母との務を全成し、二子と養育して、幸を得せしり、且他の諸事の此婦を結束するに無を以て、名利の思を去り、身を其好事に任ずるの時を得たりと思ふ○此婦困難危害の事からず死亡とも恐れざるを以て、縱令其道路に斃るとも、安んじて之を受け、化工の造化力の大ききを觀て過せし安全麗美なる時日を、實意に化工に謝する爲に、○斯の如き志あるも、讀者其婦女に適せざることを答むる勿れ、

カルルタル曰く、此婦此の如き非常の性質を遂しむも亦可からずや○此婦勇しき全世界の周遊を爲て心と悦しり

以て其宿志と達せり。○化工是の如き婦人を造出するに就ても亦其知巧に富ると、遙に學者の知識の及ばざると證すべし、

イダヘムヘル其又く貯藏せし錢貨を集て其發途と耶路撒冷及びヘイリヘランドの方より取れり其故ハ此婦既に前時よりヘイランド神の出顯し其守護して安全に此諸地を遊行するの大幸あるとを夢しと以てふり。○其周遊して視る諸事と驚愕し夫より再び家より歸れり

其貯蓄の適度かると身體の過度に健壯かるとを以て成得たる行遊の歴驗此婦をして其速に其第二回行旅の志と起

さしめりり而て今次ハ一千八百四十五年に於て斯干釐那委阿及び裸禿せる氷州の方より發途せり此旅記及び第一回のバレスチナに赴ける旅記ハ共に刷行して世に流布せし然れ共此に至て始て一千八百四十六年より八年に至るの三年よりて全成せし世界周遊を思ひ起せしと見たり。○其行旅ハ亞墨利加及び巴悉を越へ角岬を廻り智里を通行し阿他害地に至り夫より支那に航行し遂に東印度に達せり

チグリス河に浴て巴比倫及び尼尼微の廢趾に至り夫より時々危害ある地方を横過しモルデン及びペルセンの地より高加索に登り魯西亞の南部を通過せり。○夫より君士但

丁及希臘を越て家歸れり而て其快美なる諸事及び夥多
ふる見聞を簡して、然も法に協ひ且虚飾なき語を以て記
し、三巻とふし、一千八百五十年に於て、維也納にて發行せり
此非常にして、既に老ひ且外貌平易なる婦人、障碍の乏しく、
粗暴なる人種の國を經過し、勞らくして、支那、鳴來、印度、波斯、
亞拉比亞、土耳其、セルド、ペドイン、及び都兒格の諸國に
遊行し、多ハ優待せられ、又屢招請せられしり。○多くハ先
つ其諸地の婦女に接し、之と共に、其卑下なる屋に入り、身を
其婦に齊しくし、粗畧なる食を設けらるゝとも、親く之を
受け、纔に其業を助け、又小兒にハ、細貨を與て尤も樞要なる

所業禮式及び勉強すべき事件を教へ、且多く有用なる家計
を教へ、以て諸人に愛せられ、粗暴なる男子と雖も、憐愛する
に至れり。○尤粗暴なる野人、此貧婦の杖を手に取りて、是を
導き、平地を行くしり、或ハ家より家へ導き、且其貧にして卑
野なる人種と雖も、多くハ之を容待せり。○
此夥多の目撃せる遭遇あるも、其遊意尚止まず、更に地球中の
夥多なる地方を、探索訪求するを務るの思を絶ざりし。○
一千八百五十一年の春、更に新路を求め、龍動に至り、此地
にて、預り其尚廣大なる第二の世界周遊の策を定めしり。○
一千八百五十一年第三月二十二日に龍動を發し、一二の旅

客と共に常帆船に駕りて、八月十一日、初喜望峯に達せり。
○其預定の稿に據べ、此處より亞弗利加の内地に入る可
かり、不幸にして、其如くふるを能ざりし、而其自記に曰く、
予既に其初にハ、此國の内地に旅行するその便宜を得たり、
○彼此に由て、此内地に栖住する者ハ、何地にても、皆其性の
善良なるを、及び予が婦人たるを以て、實に予より先とら此
地に至れる數男子より、深く内地に入り得べきとを決せり、
而て予、其未詳の河湖に至るの路を教へ、且尚遠く行く可
とを示せし者あり、然れども、予ハ此良好なる景況と希望と
に關せず、其教へし地に至ざりし、○此地にてハ、人皆車牛馬

驅及び高價なる導誘者等の諸物を買ふ可とを説く、○此を
以て考る時ハ、予何を以て、僅百ポンド、ステルリングを以て、
今此の如く遠く來得しや、○予尚此月の内、和蘭の田夫等
と、共に小ウルクヤムスの方、小旅行を爲と企し、是此地
にて、行旅を爲の始にして、又其終末とす、
イダヘムヘル喜望府より印度諸島の諸部を巡視せんと欲
し、新嘉坡の方、發し、其最大最美なる佛尼島に至りし、是其
第一として遊覽せる地あり、而て其北岸なる英吉利の保守
せるサラロカに到り、此處より危險なるダヤクを經て、其内
地なる尼達蘭領を過ぎ、此島の西部に達せり、○或人ダヤク

中一ハ食人の地ありと云レガ此婦少一くも是を驚怖せざ
りし○シカルランに浴て、英吉利法七十里の上流に溯り夫
よりハ河に浴て、百里の遠地に行き、スカメル山脈に達
せり○此山脈上、凡二十里の處に、ダヤク人四人、獨木舟に駕
し、速走して此婦に向ひ來りて、我舟に在る人と呼て、近傍の
人種、戦闘中よりて、人の通行するを許さるを以て、速に逃れ
歸るべしと命トさる
イダヘル此に於て、其共に來れるダヤク人の内、僅に英
語を爲す者あるを以て、其衆と是を議せしが、皆悉く歸路に
赴くことを急げ共、其内の一人甚豪よりて、之に一致せず、此山

脈の前方にてハ、ラヤブ子ケの旗を以て、諸ダヤク人種中を
通過し得べし、これ其君長、其臣下の一人とも害するを好
まざればなりと云り○婦人、此説に従ひ其旗を建て、行路を
進めり○既し數時を経るの後、タムタムの響に應じて、
人の叫聲を發するを聞い、夫より速に川の曲折を廻りし
時、沈勇ふる男子と雖も、恐怖する事の事件起れり○ダヤク
の人種、男子婦人小兒、統て河邊の阜に岡上に集まれり○ヘ
ルの舟見へると、時忽ち又叫聲を重ね、恐くハ軍歌の類ふ
るべし、且つ是と共に樂曲を始め、土人各異ふる状態を爲
す○前面に當りて、高三尺ふる數箇の堡障あり、裸體ふる粗

男子、其後、一ありて、皆其パラング短廣なる刀の類を鎧ひし
り、○川の中流、此岡に對して沙洲あり、彼猛ふる指揮者數個
の舟子を率ひ、皆パラングを帶て陸に飛上れり、○爰に於て、
會議を始め、其會議中、衆男子忽ち水中に身を投じて、其
舟を圍ふ、又舟上に登れり、○へいへい、此衆人の友情を以
て來れるや、又ハ害心ありて來るやを知らず、若其乙件な
る時ハ、此婦人も其從屬も共に死を遁るゝ能はざるべし
ん、○然れども、幸して其疑惑速に解たりき、○一ダヤク人
此婦人に近接し、此婦人を扶けて、舟より陸に上らしめ、一假舎中
に到らしむ、是其人種中の酋長ありし、○婦人此處にて親

く待遇せられ、而て止むとを得ず、其婦女等と伴ひ地上に坐
卧し、且マイス粉にて作れる、各種の甚粗惡ふる食物を食せ
り、
數時間此人種中に留在一、其教法及び設用を知り、後、是に隣
接せる人種に至るの教導を得たり、是を以て、其行旅に就て、
佛尼ボニの中部、シンタグとて、此西岸より、英吉利法一百四十里
ふるの地に達せり、○此處にて、其酋長甚能待遇せられ、夫より
其酋長の舟に駕りて、カボ子ス河に從ひ、尼達蘭領の一府
ボニナクに到れり、此行旅ハ凡英吉利法二百五十里の路
程なり、

婦人へいへルハ再び行旅を、ランダキの有名なる金坑、及鑽石坑の方より爲り、今番ハ和蘭の政官懇切ニ是を扶助セリ。佛尼ニ於て、其自記するが如く、衆多なる珍奇を見て、是を其日録ニ記し、夫より瓜哇ジャバに行き、又沙馬大刺スマタラに到れり。○瓜哇の蘇兒把牙スラバヤにて、一千八百五十二年第十月十二日ニ手記セリ。此婦人の簡牘中の主件ハ左の如し、予爰ニ留在して少許の間暇を得りて以て、汝ニ予が近今沙馬大刺食人の地と行遊せしことを語らん。○此行遊ハ、予が初稿ニハ是を爲とを定めざりしが、巴達維亞バタヴィアにて逢ふ、獨逸の商人甚懇切ニ予ニ水蒸船スチムボートにて、沙馬大刺スマタラに至るべき便

路の地圖を惠り、故ニ予此島の和蘭領の首地なる把東パダンに到れり。○予が爰に來りたる時、直らニ其鎮臺ハニスウイン君、甚懇切ニ予を迎へ誘へり、然れども、予爰に留るる數日にて、騎せざれば能ざる其内地ニ進行せり。○夫より始めて止りハ、執政ハニゲルハルトト君の在り、城、路程五十パアルあり。○此執政予を扶助して、此後行旅の稿を造らしり、且數個の行路及び日に留止すべきの地處を教へり、是に加ふる、其獨立バタカ國の境界に至り迄、彼此にわたり有司に投ずべき數多の書牘を書て予に與へ、其書中ニ予を好く待遇す可とを請ふ。○此執政ハ、其地域の諸方と、甚詳密に知

れり、其故ハ凡十年前、此國民と野戦を爲し、セリングドン
中で進入せしを以てふり、○然れども、予が目的ハ、尚遙クエ
イルタン湖に到んと欲せり、○斯の如く心を定め、運と天
に任せ、以て其路程に就けり、
又曰、予が最終に歐羅巴人に逢著せし地、パダング、シテムペ
カニグ(路程二百パアル)に至れる迄ハ、頑として未だ騎に熟
せざる馬と争ひ、之が爲し大に勞せしものとあり、○此馬時
としてハ、又飛聘して僵樹及び株根を越へ進むとあり、○此
地ハ、虎、象、犀の猛獸充滿しけれども、白日の間ハ是を怖る
べしとの患ふく、且時々數里間、巨りて茂生せる樹叢及びア

ラングアラング(三四尺の高ふる草)の中を通過するをあり、
○斯く爲りて大小のマンデルリングと、アンコラを過り、
○アンコラのバドシにてハムメルス君の家に至り、爰に留
ると二日あり、其故ハ、此處にて、先導を索りざるを得ざ
ればあり、○ハムメルス君亦予を爲し數個の侯伯、並にエイ
イルタンの女王一の許多の書牘と、バタカ語にて書贈れ
り、○諸事整ひて後、予實意を以て、此最終に遇ふ歐羅巴人に
別を告げ、バタカの先導と、共に程を發せり、○路程凡二十
パアルの間ハ、予尚騎して來りしが、是より徒歩せざるを得
ず、○其初三日の間ハ、予曾てふせし行旅の内にて、最困澁

ある路ありき。○此地ハ、連綿として行通す可らざる草萊に
して、岸の踏み荒れ處又ハ高くして人頭を越すアラシグ
アラシグの中を通過し、或ハ湿地泥濘を越へ、又ハ險なる邱
陵を上下する等の路にして、多くハ赤足にて之を跋涉せり、
其故ハ、此泥地にてハ、靴の泥中ニ脱留する患わればあり。○
且、此湿地にハ、夥多の小水蛭ありて、體ニ固著し、又アラシグ
アラシグ足を切り、時に堪ゆ可らざる疼痛を發し、其既に創
を蒙りたる處を再び刺す時ハ、其痛殊ニ甚しく、且草萊中ハ、
其刺棘ニ苦り、○予各夜其アラシグアラシグの刺片を、最
勝れるバターカ人を以て、其鈍き小刀を以て、除けり。○

とを得たり。○此路中にて、一河流を涉過せしが、其水予が
頭上を越へて走流せり、此時二員のバターカ人を扶けて、
此水流を越せり。○一日として、雨有ざるハ、然れ
ども、予が衣及び布品を換ふと能はざり。○一夜草萊中ニ
露宿せしが、此時ハ虎及び蛇を甚ぞ恐怖せり。○此の如き恐
怖ある耳あらず、予ハ尚毎ニ冷地上ニ卧し、且屢半熟ニ炊
て乾燥せる米飯ニ、少く鹽を加ふる者を食せり。○以て、足れり
とせざるを得たり。○此草野中ニ宿せり、夜全く新法に
て飯を炊き、○其法ハ、米を大なる葉ニ包み、之を新
に截り、竹筒に入れ、少量の水を注ぎ、之を燃火上ニ置き、其

石川 卷一

竹の燃へ始むるに至れり、但其竹の新しき水液あるを以て、其時間甚長なり。○又曰、第三日の夕に至り、バタカの第一ウタ村は著せり。○此處に至りて、既し土人の予が行通を拒むに遇り、○幸しラジア人ハリボナル周遊を爲んが爲し、此處に在り、此人の嘗てバトシに於て、ハムメル君の處に在り、以て、予其君より是れ送るべき令狀を携へたり、○此人予が爲し、紹介せしを以て、予其村中に留ることを得たり、○此に於て、土人予が輩を以て、四面を閉ざりし小屋に行り、且米を與へたり、○ハリボナル予とエイールタン迄導き行べきを約せり、此地ハ茲と

距、尚凡七十パールあり、

又曰、其次日此行程を進めて、ハリボナルのウタに著し、其次日も此に留れり、○ハリボナル予を饗するが爲し、一犢を屠れり、○予此屠祭の處に招き、音楽舞蹈を爲して此獸を屠殺せり、○細心の其血を器中に受け、肉を數片に截り、且其最貴重せる肝と予に贈れり、○此間常に其舞蹈を止めざりしが、若し此舞蹈惡魔の供ふるが爲の者非りし時ハ、人として善心を起さしむるに至るべし、○バタカ人ハ、常に唯一惡魔を尊奉せり、是其怖る者なればなり、○彼等の説く善神ハ、必しくも崇と爲るゝ、故し是を拜祈するを要せず

麻呂志林 卷一

七

とせり。○二個の舞人、甚自在に飛動し、數分時の後、其内の長者、水と盛たる水牛角と採り、其舞蹈間、數天に向ひて之と捧げ、以て幸と祈ると見ゆ。○夫より其水の一分を予及び其徒に注ぎ、其餘を民に注げり。○又米及び小餅を以て此の如くし、其小餅と予との與へり。

又曰、此舞蹈後、又第二回の舞蹈を爲し、是ハ其死す可し定りたる人の譽への爲る者あり。○是ガ爲しサロングと木扨に結束せり。○其甲ハ是と死し定りたる者、乙ハ是と其樹木と定めたるあり。○夫より音樂に從て、其木扨を回りにて舞蹈を爲り。○此内の一人、列中より躍出て、其バラング長き小刀

を以て、囚人と突の態を爲し、其次、第二第三等の人、次第し是に從ふ。○其第一突を爲したる人ハ、此敵に對して最權勢あり。○此囚人死せりと爲したる後、其頭を截斷するの態を爲り。○夫より人頭の代りに、犢頭を蒲席上に置き、其周圍を烈しく是と飛越せり。○時々其舞蹈せる者一人、此頭を高捧し、好て其滴血を吸り、其他の者ハ、此席上し身を投して、其血を紙拭へり。○此時此輩の顔色ハ、哀憐豪猛の状なく、喜怡得意の趣あり。○其鼻、目、足、心、頬、掌、及び肝と最美の部とし、始の三品ハ、其權勢ある人の有とみせり。又曰、此祭の次日、又程を發せり。○此獨立バタアク人の國中

てハ、歐羅巴人の面と見と其稀あり、一千八百三十五年、歐
羅巴人二人、此地に到りて、土人の爲に殺し食はれし以來、殊
然り。○故に予の來れることと通知せると、殆んど流火の走
が如く、忽ち全國に流布せしハ、自然の理あり。○予が通過せ
し各村毎に、其全衆の男子、羣立して、予が行べき路を斷ち、又
忽ち其男子予を圍繞して、圈を爲し、皆槍刀、露身のパラング
と携へり。○其容顔の兇猛にして、恐怖す可と、筆紙の及ぶ所
に非ず。○其體ハ大にして強壯、其顔色ハ醜惡なり、口ハ大に
して、其上顎骨、殊に甚く突出し、多くハ其齒長く挺出せり。○
其髪ハ、長ふるあり、短ふるあり、其短ふる者ハ、刷毛の如く上

に向ひて起立せり。○頭は汚れたる綿布を纏ひ、或は染たる
布片を被ひ、稿にて之を結ぶ。其中に編稿の小笠を蒙れる
者有て、其形甚方籠に似たり。○各人一個の耳朶は、大ふる孔
を穿ち、是は一二の巻煙草を挿せし者あり。○且其人ハ全身
に服を著し、一のサロングハ、體の下部膺に至る迄を掩ひ、又
其一ハ上體の多くを掩へり。○其叫聲ハ甚驚くべし、而して彼
等予を是より先に行しりず、自頸を指して、予を殺んと欲す
の意を示し、且其手腕を嚙て、予を食んと欲すを諭せり。○
予先斯の如き兇猛なる人種に遇はりし時ハ、爰に至りて、
予の鋭氣忽ち屈す可ん。○予思ふに、此兇猛人の心を最能く

屈せしむるハ、獨我克己と友情とを以てするに在り、是を以て是に答るに、下の詞を以て、予ハ汝等の予を殺さざると、予と食ハざることを知り、望むらくハ速に予を前路に送り、汝等予の同行人ハ疑惑有ハ、唯汝等の予と伴ハ行ハ、此時ハ語り予の欠溢ハ詞に予が示セ、體様安意及び友情、遂に此兇猛人の心を屈せしめ、彼等親愛ハ聲を以て接話ハ、手と予ハ觸レ、許して前進セしめ、或ハ其村落に宿セしめ、且食物と與へしめ、○此兇民ヤ、丁に暴劇ハさらしむるハ、纔小物品を以足りしめ、和順ハらむるも、又之を以て足りしむべし、○故に予常に之ハ小物品と與へて、其意を沈

靜せしむる○右の如く爲し、數日の行路を経て、終にシリンドングと云る佳良ハる地に至れり、此地ハ沙馬大刺全島中、予が見しもの、最大最肥饒の處なり、○其長凡十五パール、幅凡五パール、高山是を圍ふ、其山ハ沙馬大刺の南より、東に向ひて横亘せり、又曰此地に在る人民、甚夥多し、多の村落散布せり、○其村落ハ五尺より六尺に至るの土堤にて圍ふ、又竹或ハ他樹を以て籬と爲し、且多ハ細溝を以て之を圍匝せり、○其家屋ハ更に見ると、得ず、是四五七尺の高ハる竹、其全村を遮隔すればなり、○此平地パタングトーン河の清流及び一二の

小流あり而てウビ芋の類を多く植耘し、且多の水牛園及び
牛の牧野此諸地甚夥多あり、此人民の不潔なりと、負擔獸の如
又曰予今筆紙の及ばざる、此人民の不潔なりと、負擔獸の如
く使役せられし婦女の不幸及び予が三值日、此人民中、在
て見し所の禮教習俗等を説き、唯此の如く諸厄に逢遇
するを厭はざりて、エイールタン湖に至んが爲に勉勵せし
り共、遂に無益と成るとを記すべし、○導者の説に據れば、予
の至りし行程ハ、其湖より纔に十五、或ハ二十パールの距離
あり、○若岡頂に上れる時は、是を見ざるふるべし、然れど
も、予を是より先し伴ふ者無りし、○導者エイールタンの土

人と不和にして、此地に至れば、大危害有んと云ふ
又曰、古來の歐羅巴人に比すれば、予がバクタカ國に入り、ハ
十二パール深しとす、○然れども、土人予に患害を加へざり
しハ、實に予に友情ありと婦女ありと由れり、○バタカ
人も亦ダヤク人の如く、予を神として待遇せり、○土人予に
告て、若し予神に非る時は、一二の補助守衛人なく、獨り此衆中
に至る可の意と、生ずると無き可と云ふ、
又曰、予が沙馬大刺の行旅、其七百二十一パールハ、騎を以て
し、百四十六パールハ歩を以てせり、○予熱を憂ひて、パタン
に到れり、然れども、強質あるを以て、速に快復し、爾後更し

不志本

第...

行旅セ一夥多の知報を爲んと欲す

イダヘムヘル沙馬大刺を發し、モリスユケン摩鹿加に至り、夫より新入ガイチア匿

に入り、又澳大利アウスタラリ亞に至らんと企せれども、遂に其意を果さ

ず、○金坑を發明し、歐羅巴人の此貴貨を欲念して、此地を輻

湊し、是が爲に、其國內の物品高價と成り、其澳大利亞に至

らざり、基因とす、○然れども、夫より之を齊しき多金の國、

角利弗爾カリホルニ聶を發せり、

一個の亞墨利加人、此婦を隨意、其國內を周遊するを許せ

ると以て、好きて其行遊をふせり、○其此地に到れるの路、六

十日間、見ざる者唯水天耳、ふれども、角利弗爾カリホルニ聶の海岸を見

に至りて、以て少くも其喜色を顯さるり、○其府佛蘭フランシス息士

哥ハ、總云時ハ奇とするに足らずと雖も、之を甚驚くべき壯觀

なりと記せり、○此地には、遊逸者ありと、把里斯及び倫頓と

くも夥し、而て其市中の不潔ふると、遙に觀斯頓コンスタンチノブル丁羅布を過

ると、○堆積せる塵沙地を覆ひ、且糞穢市中に横り、箱桶瓶壘、

衣片、布片、及び死せる犬鼠、彼此に縦横せり、○此府内を散歩

し、或ハ僅に郊外に出る毎に、必ず悔るの意を起せり、其故ハ

道路常に積沙中を歩するの艱苦有るなり、

角利弗爾聶中を數回散歩し、後船を駕して里麻に至り、

秘魯ペリウの一部を過ぎ、アマゾ子河の流出する地方に至り、工を

東...

第...

アドル中の祈多フイトより、シムボ多ソ及びコトバクシニ行き、夫よりキアヤコイルの方ニ歸久、巴那馬バナマの地峽を越へ、新珂涼オルレ士アニス一行キ久。○夫より美士細比河ミシタビカを溯りて、シントアントニの瀑布ニ至り、夫より側路ニ浴て、ニアガラの瀑布ニ行き、終ニ貴壁キエベクより波士頓ボストン及び紐育チヨウヨク至れり。○此處より又船ニて英吉利ニ行き、前年一千八百五十四年の第十二月、再び上陸せり。○其前時著せる遊記、左の如し。

婦人イダヘイヘル、今ハ其刷行すべし遊記の爲ニ勸勵せり。○其前時著せる遊記、左の如し。

其一 一千八百四十二年、維也納ウヰーンよりヘイリヘランドヘイリヘランド至れり、婦人の行旅二冊、一千八百四十五年、空ク子コニて刷行。

其二 一千八百四十五年、イダヘイヘル斯シ干厘那委阿カンジンナヒの北部、及び氷州の行旅二冊、一千八百四十六年、ペストペストにて刷行。

其三 一千八百四十六年より八年ニ至れり、イダヘイペルペルの世界周遊三冊、一千八百五十年、維也納ウヰーンにて刷行。

支那の香港島

千八百四十三年刷荷蘭
瑤函第百三十三四葉

此島ハ方今不列顛の本領ニ屬ス是迄他邦の諸民ト生計と
殊テ其野鄙ふらざリ三億六千萬の支那人ト常ニ禮義正
ニ世界ト唱テ能ク努力シ多事物ヲ思企ス西洋諸國人との親
交ヲ結ベシ爲の尤利益多く尤巨廣ス貿易場ト爲ス
香港ハ崑石多シ巨海中ニ在リ諸島の一ニシテ廣東の河口
ニ近く相對シこの一群の諸島中ニテ最北方ニあり最陸地
ニ近くシテ一里より六里の海峡を隔テ緯二十二度十七分
經百十七度十二分ニ當リ澳門の東四十里許ニシテ廣東の
東百里許ニ在リ其長ハ八里許ニシテ廣ハ五里あり其地崑石

多く遠く望バ怖ラベシ景色あれども是ニ近ヅケハ其山間
の土地美良ニシテ豊饒ス者多シと見ス其地水多くシテ
且美ふる此島名ハ支那字紅江の轉訛ス者ニシテ紅流の
義ふる蓋一河の流リ土地の色を以て名づけけり其河
美ふる瀑布とふり港ニ近シ礁上より落テ港ニ入リ新ニ
水と來り汲む船是ニ由リ大ニ便利と得るふる
土人の員數を記スル諸説一ならず千人より七千五百人
ニ至リ然れども近來の諸説皆同ク英吉利人の所領と成リ
以來土人大ニ増セリと云リ其一人加比丹ビングハム氏ハ
方今一萬五千人ありと算セリ

此島の尤も大なる利ハ、其殊勝なる港ニ在リ、恐クハ、全世界
中、是ニ勝る者なく、是無數の諸船、其内ニ滞泊するニ足るの
事ニ非ず、暴風及颶風を防ク、安全なる碇泊處なれば、
是を以て之を見、支那全國の諸港、一も是ニ比すべき者な
く、又海岸ニ近づくまで、水深ク、浦内大抵岸より一カ
ルレングテ二百三十一碼の處ニ、七十四門船を碇泊せしむるニ足
れり、此形勢のよ小ても、此島の商賣の爲ニ大利あるを見
一、全島中勝秀なるガラニート石の河渠ありて、倉廩ハ、大
小多種の倉廩を、此渠邊ニ建て、連ね、磴道埠頭を造りて、諸船
の貨物を積卸す、甚自在ならしむ、又年中飲服すべし新

水夥ト

其他、此島の利多うらす、北方ニハ、山脉連絡、海面上ニ聳
ると二千尺、○此諸山ハ、唯一分を除くの外、元禿し、種藝
を施さず、黒カラニート石矗立、其間ニ雜草矮木を生じ、著
大なる樹木なく、又他の山地の如く、溪間の平地少く、又甚狭
隘なり、諸山多くハ海中ニ直立、其脚下ニハ、僅ニ人家を建
て、耕作の地を殘す耳、○此島の内地、及び南方ハ、平地多く、北
方ニ比すれば、人家を建する、大ニ宜しと見ゆ、又此ニ好港數
處あり、其首なる者ヲチ、タン及び多クピ、ワンとす、チ
タンハ軍營あり、多クピ、ワンハチ、タンと距ると、五里

香港浦并其地近景



の地は在り、
造船場等と
置し甚宜と
地あり、此島
ハ、山雞、鶉
鶉、高く
茂りたる野
草中、雉及
び赤き野獸
と見る。○著

大なる半土ハ、少許の支那人の居住し、コウロイン街の
南東に斗出せり、此地多ハ平坦にして、物類生産し易し、○香
港府の外観ハ、其他人目と奪ふ者多し、其氣候ハ、任之慣し人
ハ甚宜し、丘阜ハ、草木多く繁茂し、雨久しければ、其土泥
濘水潦多し、コウロイン灣の側ハ、大氣常に清浄にして、天氣
の急變少し、諸事を合せ考ふると、此地方ハ、香港よりも、人民
を植るし宜しと思はる、然るに其氣候ハ、恐るべき害あると
少く、颶風、暴風、雨等の恐怖すべき天變も、港内の水利を改正
し、家屋を高く且堅牢しせば、其安全を保つべし、○當時此島
に居たる英吉利人の説に據ると、千八百四十一年、七月二十

五日の朝より、二十六日終日の間、大暴風有りて、家屋盡く倒れ、諸物相撃ち、人命財貨を失ふ者甚多し、大氣稠厚なり、其壓力呼吸を苦むるは、常は此暴風の前兆なり、其地の任人は、是に因て、暴風の近づきを知らず、未曾て誤らざると、恰も驗氣管を異ならずと云う、按ずるは、大氣稠厚、壓力強大、述者の誤りして、驗氣管を異らざると説かざらば、此器升降の理を知らざると見ゆ、上の圖ハ、香港島上、一小溪を成せる水邊の地なり、此灣を越て、近處あり、コウロンの高地を望むと、風景を寫す、此處の海口ハ、砂汀に向ひて甚狭く、處として、突兀稜角あり、此石ふらざらば、其狹隘なる谷の中央に、一大崑石の塞り

り立ると、土人智力を竭して、妙に利用を足さしめたり、即ち此崑の頂に、小溝を穿ち、其兩方に大竹の中徑一尺半あり、二尺許ある者を架し、水を導き、之を以て谷上を越て、此方より彼方へ流し、更に他地の乾枯して實らざる地へ灌ぎ、以て種藝を便し、始めて此竹視を見り、人ハ、隘溪の間、狹長にして脆弱なる橋を架し、とくと看做ん、

玉石志林卷之一終

